

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

古代メソポタミアの人々にとっての光と闇

著者	松島 英子
出版者	法政大学キャリアデザイン学部
雑誌名	法政大学キャリアデザイン学部紀要
巻	7
ページ	21-35
発行年	2010-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/6518

古代メソポタミアの人々にとっての光と闇

法政大学キャリアデザイン学部教授 松島 英子

はじめに

旧約聖書・創世記冒頭の「天地創造」の話は次のような一節から始まる。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。

「光りあれ。」

こうして光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である⁽¹⁾。

神は初めに「光あれ」と言って光を創造し、闇と分離して、それぞれを昼と夜とに割り当てたという⁽²⁾。旧約聖書によれば、神はこののち世界を構成する様々な要素を創り、生物を創り、最後に人を創造する。この話を分析すると、創世記の「著者」は、人が生活するための舞台とさまざまな舞台装置、すなわち人の生活を可能にする諸条件がまず整えられ、そののちに主役である人間が生まれた、と説明したことになる。人の生を保証する諸要素の中でもっとも基本的なものが、一日を構成する光と闇の存在である、と古来から認識されていたことが、こうして明らかになる。

人は通常光が支配する昼間に、生きるためのさまざまな営みを行い、闇に包まれた夜の間は休息をとる。これはあまりに当たり前すぎて、議論の対象とさ

22 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

れることはまれである。あるとすれば、このリズムが変則的になった場合の人の心身の健康について、あるいは社会や経済に及ぼす影響について問題視する場合であろう。しかし当たり前だからこそ、いみじくも旧約聖書の冒頭にみるように、人間生活にとってもっとも根源的な要素として、我々は捉えてきたのではあるまいか。意識的であれ、無意識のうちであれ、である。

2009年9月4－5日に京都・花園大学において催された神話学グループによる国際シンポジウムのテーマは、「光の神話」であった。本稿はそのとき私が行ったフランス語による発表《Lumière et les ténèbre dans les mythes mésopotamiens》の、いわば日本語バージョンをもとに、「生き方」への視点を加え再構成したものである。発表原稿を作成する過程において、またシンポジウムにおける各方面からの発表を聴いたことを通じて、さまざまなことを考えまた学んだ。あらためて強く思ったのは、光そしてその裏面である闇に対して、人々が多くを感じ、心に刻み、考え、反応してきたことである。そこから日常生活のレベルでさまざまな表現が生まれ、また生や死の意識との結びつきも生じている。これらのことを念頭に置きつつ、メソポタミアにおける光と闇についての意識、それが彼らの人生観に及ぼした影響について、多少の分析を試みたい。

I 神話における光

メソポタミアの神話のなかで、光そして闇はどのように捉えられ、どのように表現されているのだろうか？問題はあまりに大きく、複雑で奥が深い。メソポタミア研究者の間でも、重要な題材であることは認識されていたはずである。しかしあらためて研究史を一瞥すると、テキストの読みや注釈に関連して議論されることはあっても、この問題自体をとりあげ正面から取り組んだ研究は、後述の「光」に関する E. カサンの業績など、ごく少数にとどまっている。そうした実情を踏まえ、まずは語彙の分析から若干の視点を拾い出し、提示してみたい。

II 語彙とその分析

とりあえず私が守備範囲とするアッカド語文書において、「光」「明るさ」「輝

かしい」「(非常に) 明るい」「光り輝く」などを意味する語(名詞、形容詞、動詞)が、どのように使われているのか、例文とともに検討してみたので、その様相を述べたい。思い浮かぶ語彙を一通り並べたうえで、豊富な文例を収録している辞書 *The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*, Chicago 1956~ (以下 CAD と略号を使う) でこれらの項目を引き、例文を眺めた⁽³⁾。アッカド語の語感を現代人の私が正確に理解することは極めて難しい、というよりむしろ不可能であり、語彙の選択基準にはどうしても主観が入ってしまう。その限界を認識したうえで、CAD の訳語と例文を頼りに検討してみた⁽⁴⁾。抽出した語彙は網羅的とは言えないが、これらを一瞥して観察される事柄を、「光」を中心にまとめ、必要に応じ「闇」にも触れてみたい。

1 CAD における各項目を通読して気づいたのは、多くの文学作品から例文が集められているなかで、神話作品からの引用が思いのほか限定的なことである。光に関する語彙は、バビロニアやアッシリアで数多く作られた、神々に対する讃歌や祈祷歌に頻出している。神々を称賛するとき、その容姿の素晴らしさを形容するためである。神話や神話的叙事詩の中でも物語のヒーローの容姿を称えるときに使われるが、作品全体を見ると使用頻度は高くなく、その文脈は祈祷歌や王碑文の場合と共通している。つまりメソポタミアの文学作品は、もっぱら光が放つ効果を問題にしており、その場合、光は常に特段の力を持つ存在と結びつく。別の言い方をすれば、「光の出自」など光の存在自体が物語の主題となること、あるいは光が話の展開の鍵を握ることは、私の知る範囲では見出すことができない。

ところで、光の出所としてわれわれが真っ先に思い浮かべるのは太陽であり、次に月や星であろう。火や炎も光源となる。

メソポタミアの太陽神はウトウ／シャマシュであるが、その出自や、太陽の役割などについて、ことさら取り上げた物語は目下のところ知られていない。また、夜間の発光体としばしばみなされる月と星々についても、光とのかかわりを説明する話は、管見のおよぶ限りでは皆無である。考えてみれば不思議なことではない。歴史時代以降のメソポタミア世界では、神人同形は当然のこと

24 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

と思われていた。太陽、月、金星、火をシンボルとする神々はいるが、これらは神そのものではない。また神々は元来都市の守護神であった。彼等は人間と同様にふるまい、都市の神殿に住むが、それと同時に天上界にも住んでいる。天が光と輝きの世界であることは、メソポタミアのような光線の強い土地ではあまりに自明のことである。そこに住まう神々が安泰である限り、光の出所や機能をことさら取り上げ追及しようとする問題意識は、育ちようがなかったのかもしれない。

ところで太陽、あるいは月・星など発光する天体をシンボルに持つ神々の形容に使われる語彙のうち、とりわけ頻繁に使われているのは動詞 *namāru* (to shine brightly) とその派生形および名詞 *šrūru* (radiance, brilliance, sunlight) である。例えば太陽神についての次のような例がある。

Šamaš nūr ilī numammir ukli šarūru eddešū (KAR 32 : 26)

「シャマシュ、神々の光、闇を照らすお方、絶え間ない輝き！」

事のついでに、火の神についての言及例を挙げておく⁽⁵⁾。

Girru eddešū nūr ilāni kajānu (Maqlu II, 192)

「絶え間なく輝く火の神ギッラ、神々の常なる光！」

二つの引用文において、どちらにも *eddešū* (constantly renewing itself, ever brilliant) という形容詞が現われていることに留意したい。このように光は、正常時にあっては常に発せられ、周囲を照らし、明るさに伴う効果を及ぼすものとされていた。では何か、大きな異変がおきたらどうなるか、ということになるが、それについては後述する。

2 次に若干の語彙に関連する事柄を、簡単に触れておきたい。

ebbu は物質を純粋にしたり物の表面を整えたりしたときに現れる「輝き」を表現する形容詞である。例えば純粋な金や銀、貴石などは高貴な輝きを放ち、見る者の心に強い印象を与える。ところでメソポタミアの神殿に祭られていた高位の神々の像は、本体は上質の木材で作られ、その表面には金が施され

ていた。また金・銀・貴石を贅沢に飾った衣装や装身具・持ち物を身に付けていた。このような神像は、暗い聖堂の中でそれ自体が光輝く存在であった。神像の様子を直接描写したテキストは多くない。しかしメソポタミアの神話的叙事詩としてもっとも新しい時期の作品とされる『エッラとイシュム』の中には、次のような一説が含まれている。これは破壊欲に駆られたエッラ神がバビロンに赴き、主神マルドゥクに、なぜその神像が薄汚れているのか詰問した際の、マルドゥクの答の一部である。

「私の装身具は洪水のため損傷をこうむり姿は薄汚れた。私は火の神ギッラに、私の姿が再び¹⁾輝きを取り戻すようにすること、私の衣装を²⁾きれいにすることを命じた。しかしギッラが私の装身具を³⁾光らせる仕事を完成し、私が王冠を戴き座所に戻った時・・・」(タブレット I 140-143)⁽⁶⁾

下線部に使われている動詞語彙は順に *šunbuṭu* (*nabāṭu* の使役態)、*ub-bubu* (*ebēbu* の強勢態)、*nummuru* (*namāru* の強勢態) である。汚れを取り除いた純粋な物が放つ光や輝きが、人々に強い印象を与え、驚嘆、尊敬あるいは畏怖の念を抱かせたことがよく分かる。

もうひとつ神像と光に関する叙述の例を見よう。これは前一千年紀のテキストの一部で、ナブー神の婚礼儀式の一場面（実は神像を使って行われた祭儀）に言及したものである。

「アヤルの月・・・2日、(中略)、花婿ナブーは「最高神アヌの権威」の衣を纏い、エジダ（神殿）から（出発する）。夜だというのに、彼は煌煌と輝いている。月のようにその輝きによって、暗闇を明るく照らしている。光り輝きながら、彼はまっすぐエフルシャバ（祭殿）の中へと歩みを進める。
(中略) エフルシャバ（のなか）は、白昼のごとく明るく輝いている⁽⁷⁾。

神像と輝きの関わりは重要な問題である。「輝き」の源は、厳密に言えば発光体ではないが、神像を目の当たりにする人間にはそれ自体が発光するように見え、そうした神の姿が心に焼き付いたのである。この問題はまた機会を改

26 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

め、じっくりと取り組んでみたい⁽⁸⁾。

3 ところでこれまで検討した語彙はこれから扱う一例を除きすべてアッカド語起源である。だが、しばしば使われる名詞 *melammu* は、シュメール語 *me. lám* からの借用語である。これについてはすぐれた先行研究があることを忘れるわけにいかない。すなわち、E. Cassin, *La splendeur divine – Introduction à l'étude de la mentalité mésopotamienne*, Paris 1968である。E. カサンはこのなかで、*melammu* という語がもつ複数の側面を、近似のニュアンスを持ち合わせるいくつかの語と比較しつつ、宗教的・神話的文脈および王碑文の文脈に則して分析している⁽⁹⁾。我々の関心に則してその成果をまとめるとすれば、*melammu* は「目も眩むような強く輝かしい光であり、それを目の当たりにすると、戦慄さえ覚える」となる。当然のことながら、この語は超越的な存在すなわち神（々）、とりわけ抜きん出た英雄、あるいは特異な場面の様子を表現するため、もっぱら用いられることになる。

カサンはさらに同書のなかで、強靱な体力や卓越した性的魅力などを表現するときにも、光や輝きを表現する語彙、特に上に列挙したなかのⅡ－2の語彙が使われると指摘している⁽¹⁰⁾。また特定の色、なかでも「赤」が光や輝きをもたらず色とされていることにも言及している⁽¹¹⁾。カサンの指摘は傾聴に値するし、またこれは、メソポタミアのみならず、他の文化圏でも見られる現象であろう。いずれにせよ光や輝きは、何らかの意味で「強力な力」を象徴し、見る者の目に驚きとともに、自らとの間の落差を強く感じさせることになる。

Ⅱ－2で見た光・輝きは、周囲を照らし幸福感をもたらす、あるいは見る者に賞賛や簡単な念を呼び起こすものであった。そのような光はまた畏怖の念を誘因する。光や輝きが強烈であれば戦慄を覚えさせ、怖れで人を跪かせる。光はときに恐怖とも結びついた。こうして人々を圧倒し、卑下させる力ともなったのである。

Ⅲ 「危機」を題材とする神話

ところで神話の世界では、神々に時折危機が訪れる。その危機は、これを克服して絶賛される英雄神を登場させるための舞台装置であり、物語の本当の

テーマは特定の神の「昇進」である。代表的なものとして誰もが挙げるのは、『アンズー叙事詩』と『エヌマ・エリシュ叙事詩』であろう。二つの作品は、テーマや構成にいくらか共通するところがある。とりわけ『アンズー叙事詩』は、神々の王がその王権の拠り所を奪われるという場面が舞台になっているので、これを検討してみることにしよう。話の粗筋は次のとおりである⁽¹²⁾。

神々の王エンリルは、ある日入浴しようと王冠と「運命のタブレット」を身から外したため⁽¹³⁾、かねてから邪な企みを抱いていた宮殿の警備係である怪鳥アンズーにこれらを奪われてしまった。神々の王権を象徴する品を奪われ、世界は危機に直面し、神々は意気消沈する。そこにエンリルの息子である若きニヌルタが進み出て、アンズーを倒し奪われた品を取り戻し、英雄として神々から絶賛された。

この話のなかで、王権が奪われた時に出てくる表現には次のようなものがある。

「(神々の間に) 眩い光のような戦慄が広がった。(死のような) 沈黙が支配した」(*ittatbak namurratum šakin qūlum* I : 84)⁽¹⁴⁾

また一行おいて次のようにも言っている。

「聖堂はその眩い光を陰らせた」(*kiššu ištahaṭ namurassu* I : 86)

「光る」を意味する語根から派生した語 *namurratum* は、ここでは明るく輝く幸福な光ではない。Ⅱ－3で検討した *melammu* 同様、この光は戦慄を覚えさせる「恐ろしくまばゆい光」なのである。そして光の対概念として言及されているのは、通常考えられる「闇」ではなく、「死の沈黙」(*qūlum*) である。この点はとりわけ注目に値する⁽¹⁵⁾。

王権が危機に瀕した時、その場を支配するのが闇ではなく沈黙であるのは、『エヌマ・エリシュ叙事詩』でも同様である。神々の世界が恐ろしい敵ティアマトの攻撃にさらされていると知った時、神々は意気消沈し、なすすべもな

28 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

く沈黙したまま座り込んでしまった（『エヌマ・エリシュ』タブレットⅡ120-124）。

以上、光に関する語彙とそれが与える語感を、神話を主とする文学作品を材料に一瞥してみた。ごく簡潔にまとめれば、次のようなことが言えよう。

メソポタミアにおいて、光や発光体の起源を説明する神話は見当たらない。この地で光は、正常時にあっては常に周囲を照らし、幸福感や感嘆の念をもたらした。神像の場合は、装飾品によってそれ自体が発光するように見え、人々の心に賞賛・感嘆の念を呼び起こした。光はまた畏怖の念を誘因し、場合によっては戦慄を覚えさせ、恐怖をも呼び起こす。このような光の対概念として、しばしば言及されているのは「死の沈黙」である。

さて光や輝きは、戦慄を覚えさせ、恐怖をも呼び起こすことがあると分った。文化圏によっては、それがあまりに強い場合には「破壊」つまり「世界を破壊させる強力な光、あるいは焼き尽くす炎の光」となることもあろう。メソポタミアの場合、世界の枠組みを根底から覆し人類を破滅させたのは、炎や光ではなく「大洪水」であった⁽¹⁶⁾。

Ⅳ 闇と冥界

これまでメソポタミアの人々が「光」に対して抱いていた、イメージないしは感情を分析してきた。さて「闇」についてであるが、これも語彙を抽出し、文脈に目をやりつつ分析するのが正攻法であろう⁽¹⁷⁾。しかし語彙および文例の分析となると相当の労力と紙数が必要である。しかも「闇」の側面の一部は、すでに「光」を論じる中でいくらか浮かび上がってきた。それゆえ語彙の視点からの突っ込んだ検討と分析は、別の機会に譲ることとしたい。ここではメソポタミアにおける闇のイメージの一端を垣間見るために、闇に言及している神話の一部を紹介してみたい。引用するのは神話『イシュタルの冥界下り』の冒頭の一節である。これは冥界を舞台とする一作品で、シュメール起源の話をもととして、古バビロニア時代に原本が成立している。天に住む若い女神イシュタルは、ある日冥界に赴くことを決意した。理由は明らかでない。冥界を支配しているのは女神エレシュキガルで、天の神々の娘であり、神としての位は高い。もしかしたらイシュタルは、冥界の支配権を自らのものとして掌握し

たかったのかもしれない。

『イシュタルの冥界下り』

- 1 *a-na KUR.NU.GI₄.A qaq-qa-ri X []*
「帰還なき国」へ、・・・の地へ
- 2 *^dINANNA DUMU.MÍ ^dXXX ú-zu-un-šá [iš-kun]*
シーンの娘イシュタルは関心を抱いた。
- 3 *iš-kun-ma DUMU.MÍ ^dXXX ú-zu-un-šá*
彼女は関心を抱いた。シーンの娘イシュタルは。
- 4 *a-na É e-ṭe-e šu-bat ^dIr-kal-la*
暗黒の館へ、イルカッラの住まいへ、
- 5 *a-na É ša e-ri-bi-šú la a-ṣu-ú*
(そこへ一度) 入ったら (再び) 出ることのかなわぬ館へ、
- 6 *a-na har-ra-ni ša a-lik-ta-šá la ta-a-a-rat*
帰路のない旅路へ、
- 7 *a-na É ša e-ri-bi-šú zu-um-mu-ú nu-ú-ra*
(そこへ一度) 入ったら光を奪われる館へ。
- 8 *a-šar SAHAR^{há} bu-bu-ub-su-nu a-kal-šu-nu ṭi-iṭ-ṭu*
そこは埃が飢え (を満たし)、土くれがパンであるところ。
- 9 *nu-ú-ru ul im-ma-ru ina e-ṭu-ti áš-ba*
(そこでは) 光は見られるず、人々は闇の中にじっととどまっている。
- 10 *lab-šu-ma GIM iṣ-ṣu-ri ṣu-ba-at qap-pi*
人々は鳥のように羽の衣を纏っている。
- 11 *UGU ^{giš}ID u ^{giš}SAG.KUD šá-bu-uh ep-ru*
(そして) 扉や門の上には、塵が堆積している。
- 11' [] *šu-har-ra-a-tu tab-ba-at*
・・・恐ろしい死の静寂が広がっている。

この短い引用のなかに、「暗黒の」(*eṭû*)、「暗闇」(*eṭûtu*)、「暗闇のなか」(*ina eṭûti*)「光を奪われる」(*zummû nūra*)、「光は見られることがない」

30 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

(*nūru ul immaru*)、「恐ろしい死の静寂」(*šuharratu*)の語彙や表現がぎっしり詰まっていることに注目したい⁽¹⁸⁾。

ところで『イシュタルの冥界下り』においては、「光が奪われた状態」が闇である。光があるのが生の世界の正常な状態であり、それが奪われると闇の世界となり、また死の世界となる。つまり順序から言えば光が先にあり、次に闇が生ずる。一方、本稿の冒頭に挙げた旧約聖書創世記の説明によれば、原初「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」とあり、そこに後から光が創造された。順序から言えば闇が先にあり、次に光が生まれ闇から分離された。『イシュタルの冥界下り』と創世記とでは、この問題については認識または説明の順序が異なっている。私にはこのことは大きな論点になると思えるが、今までに議論されてきた形跡は見当たらない。旧約聖書の世界観を理解する上で重要な視点と思われることを、一言述べておきたい。

いずれにせよメソポタミアの人々にとって、冥界はまさに光を奪われた闇の世界であり、ここを支配するのはおそろしい「死の沈黙」であった。

V 現実肯定：結びにかえて

こうして見てきたように、メソポタミアの人々は光には明るく輝かしい生気と、同時に目くらむような強い光がもたらす恐ろしさを感じていた。光は生命の領域であると同時に、神への恐れを喚起し、人が近づくことのできない領域をも形成していた。一方闇は、もっぱら死の領域と重なり合うもの、死の世界を支配するものであった。メソポタミアの人々は、その間で生きていかなければならなかった。

メソポタミアの人々が虚無的な死生観を抱いていたことは、しばしば指摘されている。たしかに「冥界の王国」は彼らの概念の中に存在していた。しかしそこは地下の世界であった。冥界の王ネルガルと女王エレシュキガルは7重の壁に囲まれたラピスラズリの宮殿に君臨していたが、そこで地上の世界で死去した人間が生まれかわり幸福な永遠の生を送る、などということはなかった。「死」は人に割り当てられた運命である。『イシュタルの冥界下り』冒頭の引用に見られるように、冥界に下った死者の霊は、埃と土くれをわずかな糧

に、洞穴の蝙蝠のような姿で闇の中にじっととどまるものと想像されていた。
J. Bottéro はこうした暗い死生観を抱く彼らが、生きている間は人生をなるべく無難に、かなうことならば楽しく過ごそうとしていたと指摘している⁽¹⁹⁾。
つまりメソポタミアの人々は、現実肯定的、快楽的人生観を持っていた、というわけである。ボテロが引用しているのと同じ箇所ではあるが、本稿の論旨を明らかにするため『ギルガメシュ叙事詩』古バビロニア版の一節を以下に引用したい。

何処へさまよっていくのか、ギルガメシュよ？
お前が探し求める終わりなき命を、
お前は決して見つけることはないだろう。
神々が人間を創った時、
彼らは人間に死を割り当て、
自分たちのために不死を取り分けたのだ。
お前は自分の腹を満たしなさい。
昼も夜も自分を喜ばせなさい。
毎日宴を催しなさい。
昼も夜も踊りを楽しみなさい。
清潔な衣装を身につけなさい。
身体を洗い水浴びをしなさい。
お前の手にすぎる子供を、優しく眺めなさい。
お前に身体を寄せる妻を、歓ばせなさい。
なぜならこうしたことが、人間にあてがわれたことなのだから！⁽²⁰⁾

光と闇の問題を、世界観や人生観と安易に結びつけるのは乱暴かもしれない。しかしメソポタミアの人々は、光を奪われることを恐れ、死後はそのような世界に身を埋めることになる信じ、来世を期待することなど思いも及ばなかった。それでいながら彼らは強烈な閃光の前でひれ伏し、限りなく遜った。こうした感覚の中で生きていた人間が、自身の存在を感じ取るための心理的埋め合わせとして、現実を肯定的に受け入れ、許される範囲で人生を楽しむこと

32 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

を考えたのは、至極当然なことではなかろうか。

[注]

- (1) 『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』、日本聖書協会、1994年。(旧) 1 頁
- (2) 神の呼称はここでは「エロイム」が使われている。創世記第1章では常にエロイムが使われていて、神が6日間にわたる天地創造の仕事を終え、7日目に休息をとった後、第2章4節になって初めて「ヤハウエ・エロイム」の呼称が出てくる。
- (3) 現在までに25巻刊行されているが現時点(2009年12月)では未完結である。
- (4) 「光」に関する語彙として次のようなものを選んでみた。
 - 1) *ebbu* (adj. polished, shining) <*ebēbu* (v. to become clean),
 - 2) *melammu* (radiance, supernatural awe-inspiring sheen)
 - 3) *namāru* (v. to shine brightly) とその強勢態動詞および形容詞、名詞などの派生形: *namru* (adj. bright, radiant), *namirtu* (n. brightness, lightness), *namurratu* (n. numinous aplendor emanating from gods, kings, and things divine and royal), *namurru* (adj. of awesome brightness), *nūru* (n. light):
 - 4) *nabātu* (v. to shine brightly, to become bright) とその使役態動詞および形容詞、名詞などの派生形: *nubbuṭu* (v. to make resplendent), *šunbuṭu* (to make bright, resplendent 使役態)
 - 5) *šarūru* (s. radiance, brilliance, sunlight)
 - 6) *šūpū* (manifest, brilliant, shining) (<*apū* (v. appear III : *šūpū*)

なお、分野の先駆的研究である *La splendeur divine* (本稿Ⅱ-3 参照) において、E. Cassin は *puluhtu* と *rašubbatu* も検討語彙に含めている。しかし *CAD* がそれぞれの語に充てている主要な意味は、前者が *awesomeness, fear* であり、後者が *awesomeness, frightfull aspect* である。このように光というより、その光が特段の力を持つ存在と結びついたときに及ぼす効果の一側面を表現する語彙であり、この観点から、今回は検討対象から外した。
- (5) 動詞 *edēšu* (新しい状態である、新しくなる) の派生語である。
- (6) 松島英子『メソポタミアの神像—偶像と神殿祭儀』(角川書店、2001)、pp. 59-60.

- (7) 注 6 前掲書、pp. 206–208. 同書では発光体のように輝く神像について随所で触れている。
- (8) *ellu* (clean, pure) < *elēlu* (become pure) も神像やその付属物を形容するため使われ、光と結びついた意味を帯びることがある。
- (9) 注 6 前掲書 pp. 65–82: *Le melammu et la fonction royale*.
- (10) 注 6 前掲書 pp. 83–101.
- (11) 注 6 前掲書 pp. 104–111.
- (12) 最も新しい編纂は M. E. Vogelzang, *BIN ŠAR DADME Edition and Analysis of the Akkadian Anzu Poem*, Groningen 1988.
- (13) 「運命のタブレット」メソポタミアの王権にとって最も重要なものである。この「タブレット」には天地とそこに暮らす者の定め・運命が書き記されていた。
- (14) 別の写本では、この語は *šahurratu* (deadly silence) に置き換えられている。このことは光の対概念が「死の沈黙」であることを、何よりもよく物語っている。
- (15) 『古事記』ではアマテラスが天岩戸に隠れたとき、世は闇に覆われた。太陽神である彼女が姿を消せば光が無くなるのは当然である。『アンズー叙事詩』の場合、エンリルは姿を隠してはいないから、二つの神話の場面を単純に比較することはできない。しかし王権の危機が暗黒の闇をもたらすという場面は、ほかの神話を思い起こしても、少なくとも私の知る範囲では、メソポタミアにはない。
- (16) 古巴ビロニア時代の神話の大傑作である『アトラ・ハシース叙事詩』、あるいは『ギルガメシュ叙事詩』タブレット11に出てくる大洪水のエピソードは、これが旧約聖書・創世記の「ノアの方舟」伝説に流入したという事実ともども、あまりに有名である。
- (17) 闇に関する語彙として抽出したのは、少なくとも以下の語彙を挙げることができる。
- 1) *da'āmu* (v. to become dark), *da'ummatu* (s. darkness), *da'ummiš* (adv. darkly)⁽¹⁷⁾
 - 2) *eṭū* (v. to be dark) *eṭū* (adj. dark) *eṭūtu* (n. darkness),
 - 3) *ekēlu* (v. to be dark), *ikletu* (n. darkness), *uklu* (n. darkness)
 - 4) *ṣalāmu* (v. to become dark), *ṣalmu* (adv. black, dark),

34 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

- (18) この後イシュタルは冥界の7重の壁に設けられた門を通過し、そのたびに護身の役割を担っていた装身具や衣装を取り上げられ、身ぐるみ剥がれた姿でエレシュキガルの前に引き出され、あわれにも皮袋に姿を変えられてしまう。話はイシュタルの救済を巡って、思いがけない方向に展開するが、ここでは論旨と直接関わらないので、省略することとする。
- (19) J. Bottéro, *La plus vieille religion en Mésopotamie*, Édition Gallimard, Paris 1998, pp. 221–225 : “l’hédonisme”. 邦訳は松島英子訳『最古の宗教 古代メソポタミア』法政大学出版局 2001年、181–186頁。
- (20) 注19前掲書、183頁。原典はギリガメシュ叙事詩古バビロニア版 VA + BM iii 1–14 (=A. R. George, *The Babylonian Gilgamesh Epic*, vo. I, Oxford 2003, pp. 278–79).

ABSTRACT

Light and Darkness, and the Human Life in Ancient Mesopotamia

Eiko MATSUSHIMA

In the Genesis of the Old Testament, the God created at first the heaven and the earth.

The earth was deserted and empty and there was a darkness. Then the God created the light. We may understand that, for the authors of the Old Testament, the light created after the darkness. Anyway, it is clear that the light and the darkness are the most important elements for the human life.

In this paper, I try to collect, among the akkadian materials, especially myths and literature, a certain number of terms which mean “light, clear, radiance, sheen, etc.” as well as “dark, darkness etc.”, and examine their exact significations with context. It is not an easy work. However I found at least that the people was particularly sensitive of supernatural awe-inspiring sheen. Such a sheen made them think of the extreme power of the gods, who were immortal. Human beings were of course mortal and destined to go, after the death, to the Netherland where there were only the darkness.

So then, the people of Mesopotamia tried to enjoy their lifetime, eating and drinking, taking bath and clothing and passing the time with their family, as a scene of the “Gilgamesh Epic” tells us.